



Kodo=Araebisu Nomura Museum
野村胡堂・あらえびす記念館

令和5年度

館 報 23

館報第23号

発刊にあたって

令和5年度は、長く続いた新型コロナウイルス感染症が5類に移行したことに伴い、徐々に通常の活動を取り戻してまいりました。当館においても引き続き感染防止策を講じながら、予定した事業をすべて実施することができました。

胡堂没後60年にあたる令和5年度第1回企画展では、野村胡堂没後60年記念「野村胡堂への鎮魂曲～告別の音楽、追憶の言葉～」を開催しました。胡堂の最晩年の様子と、音楽評論家「あらえびす」にちなんだ執り行われた音楽葬の様子、胡堂を偲ぶ人々の声を取り上げました。小説家、音楽評論家としての胡堂の業績を振り返りながら、胡堂を慕う人々の思い出やエピソードなどを紹介し、親しみやすく温かな胡堂の人柄に触れていただきました。

第2回企画展では、「拝啓 野村君～学友からの手紙～」として、学友たちが胡堂に宛てた手紙を中心に、胡堂の交友関係に焦点をあてて展示しました。個性豊かな友人たちと切磋琢磨し合いながら成長していく青春期や、生涯を通して学友たちと交友を結び続けた胡堂の姿を紹介しました。また、関連事業として『学友からの手紙 野村胡堂の青春を育んだ書簡群』を執筆された八重嶋勲さんをお招きし、講演会「学友からの手紙～胡堂と学友たちとの絆をたどる～」を開催し、学生時代の愉快的思い出やエピソードが書かれている書簡を元に、当時の時代背景や交友関係など、詳しく解説していただきました。

そのほかにもレコードコンサート・文章講座・胡堂塾・朗読会、学校との連携等、幅広い年代の方々に「胡堂・あらえびす」の業績をはじめ芸術文化にふれる機会を提供してまいりました。

今後も当館が調査・研究の場、生涯学習としての学びの場、芸術文化にふれる場、憩いのひとときを過ごす場として、多くの方々に利用していただきますよう努めてまいります。

令和6年7月

野村胡堂・あらえびす記念館
館長 岩崎 雅司

目 次

発刊にあたって

1	施設の概要・沿革	1
2	令和5年度事業実績	
(1)	第39回野村記念講座	2
(2)	あらえびすりレーコンサート	2
(3)	講座・塾（あらえびす文章講座・胡堂講座・胡堂塾）	3
(4)	あらえびすレコードコンサート（名曲喫茶・蔵出し・出張）	3
(5)	あらえびすレコード定期コンサート	4
(6)	企画展	
	第1回 野村胡堂没後60年記念「野村胡堂への鎮魂曲 ^{レクイエム} ～告別の音楽、追憶の言葉～」	6
	第2回 「拝啓 野村君 ～学友からの手紙～」	13
	特別展 「胡堂と関東大震災 ～関東大震災から100年 あの日、胡堂が見た東京～」	20
(7)	連携する団体との交流	20
3	寄付者ご芳名	21
4	入館者・歳出・レファレンス及び収蔵資料利用	21
5	特定非営利活動法人野村胡堂・あらえびす記念館協力会 令和5年度主な自主事業実績	21
6	施設の利用案内	22

施設の概要・沿革

(1) 事業概要

基本構想	完了	平成4年 3月10日
基本設計	完了	平成4年11月30日
建築工事等	着手	平成5年12月17日
建築工事	完了	平成6年11月28日
工事等	完了	平成7年 3月28日
※一部展示工事等は平成7年5月20日		

(2) 建物概要

敷地面積	16,363.87㎡
建築面積	1,276.08㎡
のべ床面積	1,103.41㎡

(3) 施設概要

展示室1	ホール1	研究室1
収蔵庫3※	図書室1	読書室1 他
※内1はレコード収蔵庫（平成24年3月完成）		

(4) 工事費

基本設計	20,085千円
用地測量、地質調査	3,914千円
実施設計・監理	49,337千円
建築工事	428,480千円
駐車場整備	7,210千円
電気設備	54,487千円
機械設備	70,761千円
一般・映像展示	53,355千円
案内標識、その他	16,213千円
植栽(かたくりの丘含む)	16,318千円
合計	720,160千円

(5) 設計監理

基本設計	監修：吉武泰水
	製作：工藤卓、株式会社ディーシー
実施設計・監理	株式会社ディーシー
建築(駐車場含)	株式会社銭高組・株式会社小松組JV
電気設備	岩館電気株式会社
機械設備	岩手水道土木株式会社
植栽工事	むつみ造園土木株式会社
一般展示	日精株式会社
映像展示	コセキ株式会社
測量地質調査	東開技術株式会社
地権者	佐藤豊 佐藤昇 橋本武三 三浦章

(沿革)

年 月	事 項
昭和62年12月	野村胡堂顕彰施設建設懇談会開催（於：彦部地区）。胡堂顕彰施設建設に向けた組織作りが始まる。また、彦部地区野村胡堂顕彰会が発足。
昭和63年12月	東京高田馬場「喫茶あらえびす」馬淵巳三子氏よりレコードの寄贈受け、第1回あらえびすレコードコンサートを開催、以後定期的にレコードコンサート開催。
平成元年 7月	在京関係者と町関係者による野村胡堂・あらえびす顕彰懇談会開催（於：東京上野）

年 月	事 項
平成 2年 1月	野村胡堂の顕彰に係る懇談会を開催し、野村胡堂顕彰委員会設立の検討に入る。
平成 2年 9月	野村胡堂顕彰委員会の発足。以後同委員会を随時開催、顕彰施設の建設の検討に入る。
平成 2年12月	野村胡堂顕彰委員会と彦部地区野村胡堂顕彰会が記念館建設について協議。
平成 3年 3月	彦部地区野村胡堂顕彰会が胡堂紹介パンフレット・小冊子作成、顕彰施設建設に向け活動する。
平成 4年 3月	野村胡堂記念館建設基本構想完成
平成 5年12月	野村胡堂記念館建築工事着工
平成 6年 6月	野村胡堂記念館開館準備室設置
平成 6年 7月	野村胡堂・あらえびす記念館開館準備実行委員会が発足。以後開館に向け開催。
平成 6年 8月	東京都教育研究所と所蔵レコードに関する協議。
平成 6年11月	野村胡堂・あらえびす記念館建築工事竣工
平成 7年 2月	東京都より野村レコード・コレクションの贈呈を受ける。
平成 7年 6月	野村胡堂・あらえびす記念館開館第1回野村記念講座開催、以後定期的に記念講座開催。
平成 7年11月	野村胡堂・あらえびす記念館協力が発足し、記念館管理運営へ協力開始。
平成 8年 4月	記念館受付・清掃業務を野村胡堂・あらえびす記念館協力会へ委託。
平成 8年 5月	「第16回東北建築賞作品賞」受賞
平成 8年10月	開館1周年記念「銭形音楽会」開催
平成12年10月	「あらえびすSP名曲決定盤」CDに復刻
平成16年 4月	開館10周年記念収蔵展「挿絵展」開催
平成16年11月	開館10周年式典開催 『野村胡堂・あらえびす来簡集』発刊
平成19年 3月	「あらえびすSP名曲決定盤Ⅱ集」完成
平成21年 6月	開館15周年記念コンサート「亀吉敏子&ルー・タバキンジャズコンサート」開催
平成22年 4月	野村胡堂・あらえびす記念館協力が特定非営利活動法人化する。同法人へ記念館管理運営の一部を委託。
平成23年 1月	岡堂勝行氏より寄附金2000万円を受領
平成23年 4月	岡堂勝行氏よりレコード等約5000枚を受領
平成23年12月	レコード収蔵庫建築工事着工
平成24年 2月	「あらえびすレコード定期コンサート」が第200回を迎える。
平成24年 3月	レコード収蔵庫完成
平成24年 6月	岡堂コレクションレコード収蔵庫竣工式開催
平成24年10月	来館者25万人達成
平成26年 5月	『野村胡堂・あらえびす』発刊
平成26年 6月	開館20周年式典開催
平成28年 4月	指定管理者制度導入
令和 元年 5月	来館者30万人達成
令和 2年 9月	「あらえびすレコード定期コンサート」が第300回を迎える。

第39回野村記念講座

野村記念講座とは、松田智雄（1911-1955・野村胡堂の娘婿）が構想を示し、当館が開館した平成7年以来、毎年、講演とコンサートを併せた形で、胡堂と縁のある東京藝術大学教授などが中心となり開催している講座です。

第39回 野村記念講座

日 時 令和5年10月15日(日)
午後1時30分～午後4時30分
会 場 野村胡堂・あらえびす記念館ホール

第1部 講演会
「松田智雄著『音楽と市民革命』を再読して
——ある不出来な弟子の回想」
講師 吉野 忠彦 氏
(公益財団法人野村学芸財団理事・事務局長)

第2部 コンサート
出演 羽石 道代 (ピアノ)
上江 隼人 (声楽)
北川 森央 (フルート)
安藤 珠希 (箏)
安藤 政輝 (箏・胡弓)

主 催 野村学芸財団岩手堂子会／野村胡堂・あらえびす記念館
入場者 74人



講演する吉野忠彦氏



コンサート出演者と講師
(左から吉野、北川、安藤(珠)、羽石、上江、安藤(政))

あらえびすリレーコンサート

東京藝術大学器楽科有志と一般参加者によるピアノ音楽祭です。

日 時 令和6年3月10日(日) 午後1時30分

会 場 野村胡堂・あらえびす記念館ホール

第1部 一般参加者によるコンサート 5名参加

第2部 東京藝術大学器楽科有志によるコンサート 有森 博教授ほか3名

入場者 64人



藝大出演者
(左から岡世田、有森、掛谷、伊達)

講座・塾

1 あらえびす文章講座

胡堂と同じ文筆家を目指す、または趣味のある方のために開催する講座です。

■小説コース 講師：平谷 美樹氏（小説家）

全5回（令和5年5月27日～8月5日） 受講者：延べ49人

■エッセイコース 講師：豊泉 豪氏（日本現代詩歌文学館）

全5回（令和5年6月1日～7月27日） 受講者：延べ41人

■脚本コース 講師：道又 力氏（脚本家）

全3回（令和5年11月4日～11月25日） 受講者：延べ12人

特別講義 令和5年12月2日（土） 場所：盛岡劇場 受講者15人

2 胡堂講座

■銭形平次捕物控朗読会

令和5年9月3日（日）

朗読：大塚 富夫氏（IBC岩手放送アナウンサー）

受講者：60人

3 胡堂塾 ボランティアガイド養成講座

展示の詳しい解説やレコード鑑賞、生家見学を通して胡堂を身近に感じながら深く知る講座です。

講師：野村 晴一氏（胡堂の弟の孫）、当館館長、当館学芸員

全5回（令和5年8月4日～9月29日）

受講者：延べ23人



あらえびすレコードコンサート

1 夜の名曲喫茶あらえびす

テーマ「胡堂はジャズを聴いていたのか?!」

今回は、初めて夜の時間帯に開催。夕方から夜にかけて移り変わる美しい景色を楽しみながら、SPレコードを蓄音機で鑑賞しました。また、ナイトミュージアム（夜の開館）を行いました。

令和5年8月11日（金・祝）

解説：当館学芸員 入場者29人



2 蔵出しアナログ・レコードの時間

あらえびすホールにて、当館で収蔵しているLPレコードの中から、バロック／独奏・室内楽／協奏曲／管弦楽・交響曲／声楽・オペラの順に、選りすぐりの曲を鑑賞しました。

毎月第2・第4水曜日開催（21回） 入場者376人

案内：当館館長

3 出張あらえびすSPレコードコンサート

令和5年10月28日（土） 紫波町図書館

「おんがくとしょかん 第2夜 ミステリとSPレコード」

解説：当館学芸員

参加者：30人

あらえびすレコード定期コンサート

- 第330回 クラシック名盤『楽聖物語』70** 4月16日(日)
ソナタ形式の魅力1 解説員：侘美 淳
- ♪モーツァルト／フルート協奏曲第2番 ニ長調 作品314 (フルート：モイーズ、指揮：コッポラ、ウィーン・フィルハーモニー管弦楽団)
♪モーツァルト／交響曲第38番 ニ長調 作品504「プラハ」(指揮：ワルター、ウィーン・フィルハーモニー管弦楽団)
- 第331回 クラシック名盤『楽聖物語』71** 5月21日(日)
ソナタ形式の魅力2 解説員：侘美 淳
- ♪ハイドン／交響曲第100番 ト長調「軍隊」Hob. I-100 (指揮：ワルター、ウィーン・フィルハーモニー管弦楽団)
♪モーツァルト／交響曲第39番 変ホ長調 K.543 (指揮：ワルター、BBC交響楽団)
- 第332回 あらえびすのレコードコンサート** 6月18日(日)
東京帝大編Vol. 6 解説員：当館学芸員
- ♪リスト／前奏曲★ (指揮：オーマンディ、フィラデルフィア管弦楽団)
♪ショパン／エチュード 変ト長調 作品10- 5「黒鍵」★ (ピアノ：パハマン)
♪ノクターン 嬰ハ長調 作品15- 2★ (ピアノ：パデレフスキー)
♪ピアノ・ソナタ第2番 変ロ短調 作品35★より第3楽章「葬送行進曲」～第4楽章 (ピアノ：コルトー)
♪ワルツ 嬰ハ短調 作品64- 2★ (ピアノ：コルトー)
♪幻想即興曲 作品66★ (ピアノ：タリアフェロ)
★は、あらえびすが選曲したプログラムと曲目または演奏者が一致するもの。
- 第333回 クラシック名盤『楽聖物語』72** 7月16日(日)
ソナタ形式の魅力3 解説員：侘美 淳
- ♪ハイドン／ピアノ・ソナタ第52番 変ホ長調 作品92 (ピアノ：ホロビッツ)
♪モーツァルト／ピアノ・ソナタ第10番 ハ長調 K.330 (ピアノ：フィッシャー)
♪モーツァルト／ピアノ・ソナタ第11番 イ長調 K.331「トルコ行進曲付き」(ピアノ：グレン・ゲールド)
♪ベートーヴェン／ピアノ・ソナタ第14番 嬰ハ短調 作品27-2「月光」(ピアノ：クリストフ・エッセンバッハ)
- 第334回 クラシック名盤『楽聖物語』73** 8月20日(日)
ソナタ形式の魅力4 解説員：侘美 淳
- ♪ハイドン／ハープシコード協奏曲 ニ長調 作品21 (ピアノ：シャンピオン、指揮：フランソワ、ウィーン・フィルハーモニー管弦楽団)
♪モーツァルト／ピアノ協奏曲第24番 ハ短調 K.491 (ピアノ：フィッシャー、指揮：コーリンウッド、ロンドン・フィルハーモニー管弦楽団)
- 第335回 クラシック名盤『楽聖物語』74** 9月17日(日)
ソナタ形式の魅力5 解説員：侘美 淳
- ♪ハイドン／弦楽四重奏曲第77番 ハ長調 作品76-3「皇帝」(演奏：レナー・カルテット)
♪モーツァルト／弦楽四重奏曲第17番 変ロ長調 K.458「狩」(演奏：レナー・カルテット)
♪ベートーヴェン／弦楽四重奏曲第11番 ヘ短調 作品95「セリオーソ」(演奏：クレーヴランド弦楽四重奏団)
- 第336回 あらえびすのレコードコンサート** 10月22日(日)
東京帝大編Vol. 7 解説員：当館学芸員
- ♪ワーグナー／歌劇『タンホイザー』序曲★ (指揮：メンゲルベルク★、コンセルトヘボウ管弦楽団★)
♪ワーグナー／歌劇『ローエングリン』より第3幕への前奏曲★～婚礼の合唱★ (指揮：ティーティエン★、バイロイト歌劇場管弦楽団及び合唱団★)
♪ワーグナー／楽劇『ニーベルングの指輪』『ジークフリート』より鍛冶屋の歌★ (テノール：ロレンツ★、指揮：ティーティエン★、バイロイト歌劇場管弦楽団★)
♪ワーグナー／ジークフリート牧歌★ (指揮：ムック★、ベルリン国立歌劇場管弦楽団★)

- ♪ワーグナー／楽劇『ニュルンベルクのマイスタージンガー』より第1幕への前奏曲（指揮：ヴォルフガング・サヴァリッシュ、バイエルン国立管弦楽団）
- ♪ワーグナー／歌曲集『ヴェーゼンドンクによる5つの詩』より（抜粋）（ソプラノ：エヴァ＝マリア・ウェストブレーク、指揮：パーヴォ・ヤルヴィ、ベルリン・フィルハーモニー管弦楽団）
- ♪ワーグナー／舞台神聖祭典劇『パルシファル』より「聖金曜日の不思議」（指揮：ダニエル・ハーディング、ベルリン・フィルハーモニー管弦楽団）
- ★は、あらえびすが選曲したプログラムと曲目または演奏者が一致するもの。

- 第337回 クラシック名盤『楽聖物語』75 11月19日(日)
ソナタ形式の魅力6 解説員：侘美 淳
- ♪モーツァルト／フルート協奏曲第2番 ニ長調 K.314（フルート：モイーズ、指揮：コッポラ、ウィーン・フィルハーモニー管弦楽団）
- ♪モーツァルト／交響曲第40番 ト短調 K.550（指揮：ヘルベルト・フォン・カラヤン、ベルリン・フィルハーモニー管弦楽団）
- 第338回 クラシック名盤『楽聖物語』76 12月17日(日)
特集！クリスマス&第九 解説員：侘美 淳
- ♪バッハ／カンタータ第147番「主よ、人の望みの喜びよ」（指揮：スコット、オーボエ：ゲーセンス、バッハ・カンタータ・クラブ）
- ♪フンパーディンク／クリスマス（アルト：シューマン＝ハインク）
- ♪グルーバー／きよしこの夜（ソプラノ：シューマン＝ハインク）
- ♪胡堂のディスク・オルゴールコレクションから きよしこの夜
- ♪ベートーヴェン／交響曲第9番 ニ短調《合唱付き》作品125第4楽章より抜粋（指揮：ブルーノ・ザイトラー＝ヴィンクラー、新交響楽団）
- 第339回 クラシック名盤『楽聖物語』77 1月21日(日)
ソナタ形式の魅力7 解説員：侘美 淳
- ♪モーツァルト／ヴァイオリン・ソナタ第34番 変ロ長調 K.378（ヴァイオリン：ゴールドベルク、ピアノ：クラウス）
- ♪モーツァルト／ホルン協奏曲第2番 変ホ長調 K.417（ホルン：ケルト・ザイフォルト、指揮：ヘルベルト・フォン・カラヤン、ベルリン・フィルハーモニー管弦楽団）
- 第340回 クラシック名盤『楽聖物語』78 2月18日(日)
ソナタ形式の魅力8 解説員：侘美 淳
- ♪ベートーヴェン／ピアノ・ソナタ第8番 ハ短調 作品13「悲愴」（ピアノ：ケンブ）
- ♪ベートーヴェン／ヴァイオリン協奏曲 ニ長調 作品61より第1楽章（ヴァイオリン：クライスラー、指揮：ブレッヒ、ベルリン国立歌劇場管弦楽団）
- 第341回 クラシック名盤『楽聖物語』79 3月17日(日)
ソナタ形式の魅力9 解説員：侘美 淳
- ♪ベートーヴェン／ヴァイオリン・ソナタ第9番 イ長調 作品47「クロイツェル」（ヴァイオリン：クライスラー、ピアノ：ルップ）
- ♪ベートーヴェン／ピアノ協奏曲第4番 ト長調 作品58より第1楽章（冒頭）（ピアノ：シュナーベル、指揮：サージェント、ロンドン・フィルハーモニー管弦楽団）
- ♪ベートーヴェン／ピアノ協奏曲第4番 ト長調 作品58（全楽章）（ピアノ&指揮：アンドラーシュ・シフ、カペラ・アンドレア・バルカ）

入場者（4月～3月）490人

企画展（第1回）



（左上）紫波町名誉町民章を首にかけた胡堂
昭和34(1959)年 当時満77歳

野村胡堂没後60年記念

野村胡堂への鎮魂曲 ～告別の音楽、追憶の言葉～

野村胡堂のライフワークとなっていた「銭形平次捕物控」の執筆は、視力の低下により昭和32（1957）年『文藝春秋オール讀物』8月号掲載「鉄砲の音」を最後に終了した。その後、著作や収集した図書資料、S Pレコードなどを郷里紫波町や各教育機関に寄贈、昭和38（1963）年2月には「野村学芸財団」を設立し、同年4月14日に80歳で亡くなった。

令和5（2023）年は、胡堂が亡くなって60年の節目であり、今展では、胡堂の最晩年の様子と、音楽評論家「あらえびす」にちなんで執り行われた音楽葬の様子、胡堂を偲ぶ人々の声を取り上げた。小説家、音楽評論家としての胡堂の業績を振り返りながら、金田一京助（言語学者）や江戸川乱歩（小説家）、青木謙幸（音楽評論家）など胡堂を慕う人々の思い出とエピソードなどを紹介し、親しみやすく温かな胡堂の人柄に触れた。

開催期間 6月13日(火)～10月15日(日) 108日間

入場者数 625人

来場者の声

- ・後輩作家へのメッセージは、本当に胸にしみました。私にもあてはめて、自分の生き方の一つの指標ともなりました。晩年のラストの金田一先生との深い心の往来が印象的でした。飾らぬ文脈の中に、どちらも高い人徳を持たれて繋がっていた事、二人とも岩手の地で始まった人生の交わりに深く感動しました。松田さんの言葉、息子さんに出会える…に心が動きました。きっと出会えている筈と、親には誰でも同じです。要約されすっきりとした展示にどれだけ心入れて準備したか通ってきました。（70代、女性）
- ・胡堂さんの仕事への気持ちの向け方が、とてもよくわかりました。優しく仕事を愛する人柄に触れ、自分もそうありたいと思いました。（40代、女性）

最晩年の胡堂

昭和28（1953）年に、「銭形平次捕物控」は300編を超えた。その頃、胡堂は白内障を患い、二度にわたって手術を行い一時的に回復するも、再び視力が低下し執筆が困難になった。昭和32（1957）年、約27年に及ぶ銭形平次シリーズ全383編が、『文藝春秋オール讀物』8月号掲載の「鉄砲の音」をもって終了した。胡堂は、中学時代の創作から新聞記事、音楽評論、小説まで、生涯すべての執筆の筆を擱いた。昭和33（1958）年3月に長年の執筆活動が評価され、第6回菊池寛賞を受賞。翌34（1959）年12月には、紫波町名誉町民第一号に推挙、昭和35（1960）年11月に紫綬褒章を受章した。

「銭形平次」の連載終了後も作品の人気は続き、映画やラジオドラマに登場し続けた。ラジオ東京で開局以来放送されていたラジオドラマ「銭形平次捕物控」は、昭和32（1957）年に300回を超えた。同年7月には、K Rテレビ（現TBSテレビ）で、初めてドラマとなって放送されている。

昭和34（1959）年、胡堂はこれまでの人生を振り返り、「胡堂つれづれ控」を口述筆記で内外タイムス（東京の夕刊紙）に連載した。筆記は、捕物作家クラブの幹事長で作家の田井真孫が行い、同年、この連載をもとにした胡堂最後の随筆集『胡堂百話』が刊行された。

胡堂は、妻ハナや家族の協力を得て、著書や収集した歴史資料などを各教育機関に寄贈した。昭和31（1956）年に郷里紫波町に著書を寄贈し、翌年地元公民館に「胡堂文庫」が開設された。胡堂文庫には、その後も著書や

希望する図書と資金を繰り返し寄付した。長年収集したSPレコードの一部、約7,000枚と蓄音機のコレクションは、東京都教育研究所に寄贈した。昭和37(1962)年12月には、時代小説を執筆する際に用いた武鑑や江戸切絵図、歴史関係図書を、三女稔子の夫松田智雄東大教授を通して東大史料編纂所に寄贈した。昭和38(1963)年2月、胡堂の最後の大仕事となる「野村学芸財団」を設立。創立発起人には、胡堂の意思に賛同した各界の名だたる人々が名を連ねた。

3月末から肺炎を患い、翌月には起き上がることができなくなっていた。医師で同郷の小野寺直助が診察すると、病状が悪化していた。それを知った金田一京助は、啄木忌日の法要の合間を縫って、胡堂を見舞った。そのとき胡堂はほとんど話すことができなかったが、京助の言葉に微笑んだという。



名誉町民に野村氏を推挙
広報しわ 第54号 昭和35(1960)年1月5日発行
【画像提供：紫波町】

紫波町名誉町民条例ができてから最初の名誉町民として、野村長一(胡堂)氏が十二月の定例町議会で議会の満場の同意で推挙されました。(略)郷里に胡堂文庫を寄贈するなど、町の文化の興隆に寄与し町民の敬仰的となっています。



栄えの紫綬褒章 名誉町民 野村長一氏に
広報しわ 第65号 昭和35(1960)年12月1日発行
【画像提供：紫波町】

野村氏の受章理由に『大衆小説の長老としてゆるぎない創作活動を続けたこと。その文章は格が整いその中に一脈の清新味とそこはかない情感をたたよわせ、多くの愛読者を持ちわが国、大衆小説の発展に貢献した』とたたえられています。

「代筆ではいい文章がかけませんよ」

胡堂が筆を擱いたのは、視力の低下が理由である。胡堂は、「いくら書いてもあきるとか、いやになるということはなかった。書くことが楽しくてしかたがなかった。だから、目が悪くてどうしても書けないとわかった時にはさびしかった」と心境を語っている。寂しいと言いながらも、胡堂は口述筆記による小説執筆は行わなかった。その理由に「口述ではキメのこまかい文章が書けない。目が見えなくなるということは光を失うことだ。そんな暗い気分から平次は生まれてきませんよ」と語った。他者の協力を得ながら、口述筆記で小説を発表することも可能だったはずだが、胡堂は「代筆ではいい文章が書けませんよ。話すことと書くことはまったく別のことです」と言う。

連載終了が発表されると、「もっと書いて欲しい」という手紙が数多く届いた。多くの平次ファンにとって新作が発表されないことは寂しいに違いないが、作品は愛され、映画やラジオドラマ、テレビドラマで平次の活躍を見ることができた。

新聞コラム「胡堂つれづれ控」と随筆集『胡堂百話』

昭和34(1959)年4月から、夕刊紙「内外タイムス」にコラム「胡堂つれづれ控」を掲載。執筆が困難だった胡堂の代わりに、後輩で捕物作家クラブの幹事長、田井真孫が代筆した。昭和32(1957)年に「銭形平次捕物控」の連載を終了してから、久しぶりの新聞連載となった。

連載にあたり、胡堂は「年を取ったからといって何も威張ることはないが、経験だけは遠慮なく蓄積されてゆく。下らない経験もあれば、おもしろかった経験もある。その中から多少でも意味のあった思い出を、気の向くままに書き残してみたい」と話した。

連載は同年7月まで続き、11月には連載を100編にまとめ、随筆集『胡堂百話』として刊行。これが胡堂最後の随筆集となった。



随筆集『胡堂百話』
昭和34(1959)年11月10日発行
角川書店

告別の音楽 追憶の言葉

昭和38（1963）年4月14日昼0時40分、妻ハナが昼食の用意をするため寝室を離れ、戻ってくると、胡堂は息をひきとっていた。満80歳と6ヶ月の人生は、静かに幕を閉じた。当日の新聞の夕刊に訃報が伝えられ、翌日には地元紙岩手日報にも大きく掲載され、広く県民に胡堂の死が伝えられた。

15日夜7時から杉並区上高井戸の自宅で通夜が行われた。夜が更けても参列者は後を絶たず、雨が降るなか200人を超える人々が訪れた。胡堂が会長を務めた「捕物作家クラブ」の会員らは、会員揃いの印半纏しるしはんてんを着て参列し、胡堂との別れを惜しんだ。金田一京助、江戸川乱歩、野村光一、井深大、浴風園（自宅近くの老人福祉施設）の関係者から、胡堂を偲んで数々の思い出が語られた。京助は、胡堂が亡くなる前日に野村家を訪ね、手を握って思いを交わしたことを語り、参列者の涙を誘った。通夜では終始クラシック音楽が流れていたという。

告別式は19日午後1時から、東京の青山葬儀場にて、音楽評論家「あらえびす」にちなんだことと宗教色を無くすこととして、音楽葬で執り行われた。朝から雨が降るなか、会葬者の列が続いたという。故郷岩手から野村家の親族、紫波町長、紫波町議会議長が参列した。胡堂には、従四位勲三等瑞宝章（現行の瑞宝中授章）が贈られ、告別式の祭壇には、瑞宝章、紫綬褒章、紫波町名誉町民章が飾られた。

二期会合唱団が歌うバッハ作曲「マタイ受難曲」で始まり、葬儀委員長の旧友金田一京助、音楽評論家の堀内敬三による追悼の言葉が述べられた。そして、創立2年目（昭和37年創立）の読売日本交響楽団（山本直忠指揮）がベートーヴェンの交響曲第3番「英雄」の第2楽章（葬送行進曲）を、若くして亡くなった長男一彦のチェロの師であった佐藤良雄がバッハ作曲「チェロ組曲第5番」を演奏した。葬儀の場でオーケストラなどの生演奏は、当時としては異例だった。胡堂が生前によく聴いていたというヘンデル作曲オラトリオ「メサイア」のレコードは、ソニー（井深大）とデイスカ社（青木謙幸）の協力で会場に流された。

胡堂を慕う多くの人々と生涯愛したクラシック音楽に包まれながら旅立った。



胡堂の告別式の様子



胡堂の祭壇には、左から紫綬褒章、瑞宝章、紫波町名誉町民章が飾られた。



追悼の言葉を述べる金田一京助



祭壇に花を手向ける三女稔子と夫の智雄



親族席に並ぶ野村一家
左からハナ夫人、三女稔子と夫の松田智雄、孫の信雄さん、碧さん

読売日本交響楽団

昭和37（1962）年4月、日本のオーケストラ音楽の振興と普及のため、読売新聞、日本テレビ放送網、読売テレビ放送の3社を母体に創立された。

名称は、当時の読売新聞社社長・正力松太郎しょうりき まつたろうの「日本を代表して世界を舞台に活躍するオーケストラを作る」という強い意志により、原案の「読売交響楽団」に「日本」が加えられ、「読売日本交響楽団」となった。

創立以来、世界的な巨匠を指揮者に招くとともに、世界の名だたるソリストと共演し、現在は日本を代表するオーケストラとして知られている。

胡堂の音楽葬では、創立2年目の読売日本交響楽団によるオーケストラの生演奏が行われた。胡堂が約30年務めた報知新聞社と読売新聞社が合併していることから、胡堂の葬儀に読売日本交響楽団が追悼演奏したと思われる。



逢いさえすれば、全面的にお互いが
すっかり過去がわかっているゆえ
親密水も洩らさなかった

金田一京助（言語学者）

金田一京助「ああ野村胡堂君」より 野村学芸財団『野村胡堂氏を偲ぶ』

【写真提供：盛岡市先人記念館】

私の思い出の野村さんは、文豪の少年時代にふさわしい。盛岡中学一年の頃から学校じゅうが目をそば立てる変りものだった。（略）

三・四年級ごろ、（略）杜陵吟社を起こして日本俳句の同人、俳人野村堇舟となった。正岡子規が万葉調の歌をはじめや、吟社も短歌に凝ったが、野村君がやはり白眉だった。新体詩も一等うまかったし、殊に小説は、中学生の作と思えないような優艶華麗、老成な筆致で鏡花の名文を思わせた。その評論がまた多読で達識だったものだから、ズバ抜けていて同人を啓発してくれたものだった。（略）情熱家であつたけれども、目先が利いて聡明だったし、いつも、ゆたかな笑いを湛えて決して人と争わない寛容さをもっていたから啄木のような我がまゝものでも、いつも一目も二目も置いてその啓発を受けていた。

もっと意地わるな所があつたら、もっと深刻な芸術的作品へも熱中されたか知れないが、明るい楽しい大衆小説に蹈晦されるのも、そのお人柄であろう。これが文豪胡堂翁の短所でもあり、長所でもあろうか。が岩手の生んだ最大の文豪とたたえて不足はない。

金田一京助「文豪野村胡堂翁」より 現代国民文学全集 月報 第3号 野村胡堂全集付録
昭和32（1957）年6月30日発行 角川書店



金田一京助文化勲章受賞祝賀会でお祝いを述べる胡堂
左から徳川夢声、野村胡堂、ハナ、金田一京助
昭和29（1954）年12月29日 杉並区役所



野村さんの好意に、
私は感動したものである。

【写真提供：立教大学江戸川乱歩記念大衆文化研究センター】

野村さんには戦時中にも一つの好印象がある。情報局の方針で、探偵小説が全く書けなくなっていたころ、何かの作家の会合があって、多勢の作家が広い日本座敷で食事を共にしたことがある。その席で野村さんは私のために弁じて「古書通信の探求書欄を見ると、江戸川乱歩全集が屢々出ている。現存作家でこんなに古書の珍重される人は滅多にない。これは如何に世間が江戸川君の作品を求めているかを証するものである。今同君は全く沈黙しているようだが、雑誌社はこの人に大いに書かせなければいけない。エドガア・アラン・ポーをもじった筆名が敵性的でいけないなら、本名で書けばいい。犯罪を描くなというのなら、例えば冒険小説で、江戸川君の持ち味を発揮すればいい」と激励してくれた。私は当時も今と同じように、たとえ禁圧がなくても、書けない状態にあったのだから、この野村さんの激励は、必ずしも私自身の気持ちの壺にはまっていたわけではないが、探偵作家などは最も肩身のせまい当時の公の席で、こういうことを発言してくれた野村さんの好意に、私は感動したものである。

江戸川乱歩著『探偵小説四十年』より 昭和36（1961）年7月5日発行 桃源社

江戸川乱歩（小説家）



探偵作家クラブ会合で挨拶する胡堂
左から野村ハナ、胡堂、江戸川乱歩



【写真提供：青木博幸氏】

先生は謂わば「ディスク」の生みの親の一人であり、私にとっては慈父のような温かな方であった。

青木謙幸（音楽評論家）

先生は作家としても稀れな美文の持主であったように思う。数多いレコード音楽についての記事を今とり出してみても、新鮮で生き生きしている。先生の書かれた「楽聖物語」は正にレコード壇の金字塔であろう。これにはあらえびす先生の音楽観と、ヒューマニティが満ち溢れている思いのすることである。（略）

「ディスク」誌も、又私個人としても先生の恩恵に浴することが非常に多かった。

先生は謂わば「ディスク」の生みの親の一人であり、私にとっては慈父のような温かな方であった。

今年の春お見舞に上ったところ「医者がね内臓がまだ五十代の若さだから百歳まで長生きするというていたよ」とお笑になっていたのに、それから僅か四ヶ月で突如急性肺炎で亡くなられた。享年八十歳、年には不足はなかっただろうが、もっともっと長生きして欲しかったと思う。

ここに謹んで先生の御冥福を祈ると共に多年に渉る御指導に心からなる感謝を捧げたい。

青木謙幸「あらえびす先生のこと」より 『ディスク』昭和38（1963）年8月号



野村胡堂と青木謙幸

2人の後ろには、蓄音機の王様と言われた「ビクトローラ・クレデンザ」がある。胡堂は晩年、青木に愛用の「ビクトローラ・クレデンザ」を譲り渡し、その後、青木の姪である井東富士子氏に引き継がれた。現在、東京の神田神保町にある「富士レコード社」にあり、現役でSPレコードを鳴らしている。



左から稔子、孫の碧さん、胡堂

花好き、とくに野生の
コスモスのかれんさにひかれる父だったのです。

松田稔子（胡堂とハナの三女）

母との仲のよさ。外に行くときはもちろん、家の中でもいつもいっしょでした。（略）私がいざかいと、名をどうにかつけられるのを見たのは、ただ一度。死の四日前でしたか、「おふろにはいりたいというからいれてあげれば、本が読みたい。読んであげれば音楽が聞きたい……。いくらせっかちなあなたでも、死ぬことまで急がなくなつて……」と母が泣いたくらいのこと。

「しかられちゃったよ、かあさんに」と父はうれしそうでしたが。

平次ものの筆を折ってから6年。以来、父の喜びは、母に歴史の本を読んでもらうことと、花の手入れでした。

80歳の老齢。死期を感じていたのか、近ごろ、父を訪れると、書斎からよくヘンデルの『メサイヤ』（救世主）の荘厳なシンフォニーがもれていました。『メサイヤ』はなくなった長兄が好きだった曲だそうです。死んでむすこに会える、そんな気持ちだったのでしょうか。（略）

「思いのこすことは何もない」と父はいいましたが、私には思いのこすことばかり。冥福を祈るだけです。

松田稔子「やさしき父よ安らかに眠れ」より 昭和38（1963）年5月1日発行 週間女性



胡堂とハナは、いつでも一緒

ふるさとでの追悼法要

ふるさと紫波町では、月命日にあわせ翌々月の6月14日午前10時から野村家の菩提寺高金寺で、町主催の追悼法要が行われた。東京から、妻ハナと三女稔子夫妻が出席。胡堂の弟耕次郎、岩手県知事代理として知事秘書、山本盛岡市長、県議会議員や町議会議員、小学校時代の同級生4名、各種団体など関係者あわせ約180名が集まった。

祭壇には胡堂が受章した瑞宝章、紫綬褒章、紫波町名誉町民章が置かれ、会場には、捕物作家野村胡堂を象徴する朱房の十手、胡堂直筆の和歌「半分は、残る徳利のふり心地、八が来る夜の雪となりつつ」の色紙が飾られた。平次の子分八五郎への思いやりや、胡堂の温かな人柄が感じられる。

開式の辞のあと、紫波町民を代表して村谷永一郎町長が追悼の言葉を述べた。続いて金田一京助が青山葬儀場で述べた弔辞を、京助の弟平井直衛が代読した。町内全寺院の僧侶20名による読経のなか焼香がおこなわれ、追悼法要が終わると、胡堂の遺骨は親類一同によって高金寺の野村家の墓に納骨された。そのあと、郷里の作家鈴木彦次郎による追悼講演会が行われた。



胡堂直筆の和歌
(常設展示室にて展示中)

関連イベント

胡堂講座 銭形平次捕物控朗読会 ―最終話 鉄砲の音―



令和5年9月3日(日) 午後1時30分～3時

今年も大塚富夫さん(IBC岩手放送アナウンサー)による朗読会を開催しました。今回は、企画展「野村胡堂への鎮魂曲」のなかで取り上げている、胡堂の代表作『銭形平次捕物控』全383話の最終話「鉄砲の音」を朗読していただきました。また、胡堂最後の随筆集『胡堂百話』のなかから 銭形平次にまつわる遺筆を朗読していただきました。銭形平次の世界をより身近に感じてもらうことができました。



関連イベント

読売新聞共催SPレコードコンサート 野村胡堂への鎮魂曲



令和5年10月1日(日) 午後1時30分～3時

解説: 侘美 淳

毎年開催しているコンサートですが、今年は胡堂が没後60年を迎えたことから、胡堂の音楽葬で演奏された曲が収録されているSPレコードを蓄音機で鑑賞しました。音楽葬は創立2年目の読売日本交響楽団が演奏し、胡堂と読売新聞のつながりを紹介しました。また、胡堂と親交の深かった井深大(ソニー創業者)が通夜でスピーチしている音声を聞き、コンサートを通してあらためて胡堂を偲ぶことができました。



レクイエム

野村胡堂没後60年記念企画展「野村胡堂への鎮魂曲～告別の音楽、追憶の言葉～」展示目録

No.	資 料 名	年 代	備 考
1	「報知川柳 胡堂選」直筆原稿	年月日不明	
2	「も一度記者になり度い」直筆原稿	年月日不明	原稿用紙13枚
3	音盤懐古漫談会 プログラム	昭和15(1940)年6月16日開催	会場：公会堂大食堂 (岩手県盛岡市)
4	現代国民文学全集第3巻『野村胡堂集』	昭和32(1957)年6月30日発行	角川書店
5	野村胡堂作品集第1巻『銀次売り出す』	昭和32(1957)年7月10日発行	昭和33(1958)年4月発行 まで 全10巻 東方社
6	『家の光』8月号 「銭形平次捕物控 槍の穂」	昭和32(1957)年8月1日発行	家の光協会
7	『文藝春秋 オール讀物』8月号 「銭形平次捕物控 鉄砲の音」	昭和32(1957)年8月1日発行	文藝春秋新社 「銭形平次捕物控」シリーズ 最終話
8	捕物作家クラブ半纏	年月日不明	「野村胡堂」名前入り
9	『銭形平次捕物控全集』全50巻	昭和28(1953)年5月～ 昭和30(1955)年7月発行	同光社
10	第6回菊池寛賞受賞記念時計	昭和33(1958)年3月受賞	
11	『文藝春秋 オール讀物』9月号 「平次と生きた二十七年一筆を折るの弁」	昭和32(1957)年9月1日発行	文藝春秋新社
12	小泉信三書簡 野村胡堂宛	昭和32(1957)年7月21日付	便箋3枚
13	随筆集『胡堂百話』	昭和34(1959)年11月10日発行	筆者署名入り 角川書店
14	『野村胡堂氏を偲ぶ』	昭和39(1964)年3月発行	野村学芸財団
15	野村学芸財団会報第1号	昭和40(1965)年10月16日発行	野村学芸財団
16	紫綬褒章記念品 金杯	昭和35(1960)年11月3日受賞	個人蔵
17	録音テープ 胡堂を偲んで(金田一京助、江戸川乱歩、 野村光一、井深大ほか)	昭和38(1963)年4月15日録音	胡堂の通夜において録音 オープンリール2本
18	金田一京助弔辞	昭和38(1963)年4月19日	盛岡市先人記念館蔵 平井直衛宛 金田一京助封 筒付
19	金成まつ筆録、金田一京助訳注 「アイヌ叙事詩 ユーカラ集 Ⅲ」	昭和38(1963)年2月25日発行	三省堂
20	金田一京助書簡 野村胡堂宛	昭和10(1935)年12月13日付	金田一箋 1枚
21	江戸川乱歩書簡 野村胡堂宛	昭和23(1948)年10月2日付	便箋1枚 返信用葉書
22	洋楽レコード専門雑誌『ディスク』 第10巻 12月号	昭和13(1938)年12月1日発行	グラモヒル社
23	名刺入れ(野村胡堂、ハナ)	年月日不明	

※旧字体は、適宜新字体に直しました。

※所蔵者名の無記載は、野村胡堂・あらえびす記念館の所蔵資料です。

企画展（第2回）



拝啓 野村君 ～学友からの手紙～

当館所蔵の書簡2077通の内、胡堂に宛てた学友からの書簡は562通残っている。今展では、胡堂の交友関係に焦点をあて、学友たちが胡堂に宛てた書簡を中心に展示した。

友人たちと切磋琢磨し合い成長していく胡堂の青春期と、学生時代の思い出を大切にし、交友を結び続けた生涯を、個性豊かな学友たちとの愉快的エピソードの数々とともに紹介した。

開催期間 12月12日(火)～令和6年3月17日(日) 77日間

入場者数 192人

来場者の声

- ・野村胡堂としての説明を見てから企画展の手紙を見ると、イメージががらりと変わって人間味あふれる人柄だったのだと思いました。手紙の内容がとても興味深く、一層の野村胡堂の魅力に惹かれました。新聞の記事も面白かったです。(30代、女性)
- ・盛中時代に出会った仲間たちと生涯交流が続いていたこと、節目節目で友人たちがそばにいてくれたこと、学生時代の回想などを見ると、学友っていいものだな～と思いました。それも多くの仲間に関わっていた胡堂さんの魅力なんだろうなと思いました。ありがとうございました。(50代、女性)
- ・当時の社会状況の中で、各々の学生が個性を存分に発揮しながらも、確かな力でしっかり繋がっていた事を又々実感した。(再認識させられた)それが生涯に渡る交友となり、岩手がいかに多様な場面で重要な人材を輩出したかがよく分かりました。その中心に胡堂が存在していた事を誇りに思います。(70代、女性)

学生時代の交友

野村胡堂（本名長一※以下胡堂と表記する）は、明治15（1882）年10月15日に野村長四郎・マサ夫妻の息子として紫波郡大巻村（現紫波町大巻）に生を受ける。

胡堂は地元の彦部尋常小学校、紫波高等小学校を卒業し、明治29（1896）年に盛岡の岩手県尋常中学校（のちに岩手県立盛岡中学校と改称。現岩手県立盛岡第一高等学校。※以下盛岡中学と表記する）へ進学する。

新入生には同級生となる金田一京助（言語学者）、郷古潔（三菱重工業社長）、及川古志郎（海軍大臣）、田子一民（衆議院議長）ら、上級生には米内光政（内閣総理大臣）、原抱琴（本名達、俳人）らが、後輩に石川啄木（詩人、歌人）らがいた。のちに学者や実業家、政治家となる錚々たる面々が同時期に在籍しており、「盛岡中学の黄金時代」と称された。

胡堂は、盛岡中学の教師で漢学者の猪川静雄の「猪川塾」に下宿し、そこで下宿仲間たちと愉快的青春期を過ごす。当時盛岡中学では文学活動が盛んで、学友たちとやり取りした手紙には、文学に関わる内容が多く記されている。

明治32（1899）年、正岡子規門下の原抱琴の影響で、胡堂は俳句を始めた。（俳号は董舟・董村・右近など）抱琴が指導役となり、同年文学団体「杜陵吟社」が結成され、胡堂もこれに所属し、他県の俳句グループと交流するなど積極的に活動した。

胡堂は明治35（1902）年に盛岡中学を卒業し、同級生らもそれぞれの進路を歩み始めた。進学を志し上京した胡堂は、明治37（1904）年東京第一高等学校（現東京大学教養学部）へ入学。当時の校長は同郷で尊敬する新渡戸稲造であった。一高では雄弁会や俳句会に参加、盛岡中学時代同様俳句に熱中し、新たな友人たちとの交友が広がった。

医師になってほしい父親と進路について衝突を繰り返すも、最終的には法律を学ぶこととし、明治40（1907）年に東京帝国大学法学部（現東京大学法学部）へ進学した。

明治43（1910）年には東京の岩手県人会で再会した同郷の橋本ハナと学生結婚。同年、父長四郎が急逝したことで学費の送金が途絶え、授業料を納めることが困難になり、明治44（1911）年胡堂は大学を除籍された。

胡堂に宛てた親友・岩動露子の手紙



岩動露子書簡 野村胡堂宛

明治32（1899）年4月11日付

岩動露子が文学について論じている。「君、僕はたしかに君の親友だ」「さあ二人で純文学、神聖なる文学の為にあばれよふ」の記述が印象的である。

この書簡で、胡堂は「露影」、露子は「露葉」という号を使っている。

「さあ二人で純文学、神聖なる文学のためにあばれよふ。」

「孤独でないで、君、僕はたしかに君の親友だ。」

よふ。

神聖なる文学の為にあばれ

せぬもの兄き、さあ二人で純文学

後來提「げ」て立つべき友だぞ由「油断

いぞ君、僕はたしかに君の親友だ

もとの露葉様だ、天外の孤独でな

のた例だから案じ給ふな露葉は

嫌だ交るもせん、白旗を掲ぐるといった

学には降参なんか嫌だ絶対的

を受けた我はあくまでも偉人文

文が拙だ為か計らず君に誤解

人文学に白旗を掲ぐる」ところ余の

「余は偉

いするぎ ろし
岩動 露子

明治16（1883）年—大正7（1918）年

フランス語教授、俳人。本名孝久。岩手県紫波町出身。盛岡中学時代、胡堂らと杜陵吟社を結成、中心的役割を担う。東京外国語学校（現東京外国語大学）仏語科卒業後、陸軍中央幼年学校フランス語教授となるが、病気のため35歳で逝去。

胡堂へ宛てた親友・原抱琴の手紙



原抱琴書簡 野村胡堂宛

明治32（1899）年9月4日付

胡堂が3日間で作った俳句400句に対する抱琴からの返信。胡堂の句を具体的に添削し、師である正岡子規の教えや助言を添えている。また、自作の句も加え、互いに批評し合うことが大切であることを説いている。

小説では趣深い題材、詩俳句になりそうなる題材も、俳句においては一文の徳にもならないのです。

私が抱かれているのは、君は俳句と小説を同一視してはいないか、ということなのです。

努めて「天然」の句を作る必要があると思う。

「天然」の句には「いやみがなく、人事的」の句には「俗っぽさがあります」。

扱われ等の時代には人事的の句は作りやすく天然の句は作りにくきものに候されど子規、虚子等も暫々云ふ如く天然の句には「いやみなし人事的の句には往々俗気ありされば吾人はつとめて天然の句を作るにつとむる事必要も存候

実際は人事は変化あり、天然は変化なければ天然の句に飛びすぐれて名句は得たきもものなるべきけれど、わか友紫人がある如くうまきは、全く俳句と云ふもの始めて知りし時より日本派の俳句ばかり見て俗句を見ざりしかばにてそのあかぬけしたるはそのために候

而してわれはきみの尤も小説を得意とし給ふを知る而して小説は常に複雑なる人事を■画くを以て小説家は往々俳句の天地を狭く思てを知る。

われはいと恐るるは、きみの或は俳句と小説とを同一視給はざらん事にあり。もとより俳句はその天地天然にかざられたるにあらねどその重なる舞台は天然にあり。かの小説のその舞台の人間の上にあると稍異なるを知り給へ。されば小説にて、あはれ深き材、詩的なりてふ材も俳句に於ては往々一文の徳もなきを知り給へ。

はら ほうきん
原 抱琴

明治16（1883）年—明治45（1912）年

俳人。本名達。岩手県盛岡市出身。叔父は原敬。盛岡中学の先輩。東京府立一中（現東京都立日比谷高校）を経て東京帝国大学法科大学仏法科へ進学。卒業直前に逝去。正岡子規門下で、胡堂らが結成した杜陵吟社の指導役となった。

胡堂へ宛てた友人・柴浅茅からの手紙



柴浅茅書簡 野村胡堂宛

明治38（1905）年8月22日付

以前胡堂の実家でご馳走になった「南部の三年味噌」が美味しかったことを父に話したところ、ぜひ食べてみたいということになり、味噌の購入を依頼している。柴浅茅は、一高俳句会で胡堂とともに俳句に熱中した友人。

最も大きい樽で一個ずつにでも送っていただけないだろうか。

君の家でご馳走になった「南部の三年味噌」を父に勧めたら、食べたがつてね。

妙な謂はれ因縁で遂に一臂の力を此の三年味噌事件の為に添へられんことを敢て 君に切望すると云つた破目になったのサ、
それで どうだらう、今直ぐと云つて直ぐに 送つて頂けやうか、実は此の手紙に同封で代金を御送附致そうかと思つたのであるが何にしろ樽の大小が少しも分らないので 其辺の見当が皆目 つき兼ねた為
其運びに致すとは出来兼ねた次第であるが、君の御尽力によつて 樽ならば「最も大きいやつ」を一個 通運便か何かで 直ぐにでも送つて頂けまいか、同時に

しば あさじ
柴 浅茅

明治14（1881）年－昭和44（1969）年

大審院判事。本名碩文。胡堂の一高以来の友人。荻原井泉水らと一高俳句会を興す。浅茅と号し、正岡子規に俳句を学び、俳人法官として知られる。

後輩からの手紙 — 野村胡堂と石川啄木 —

野村胡堂は石川啄木のことを「人間はどちらかと言えば欠点だらけの扱い憎い男で、決して学生としては品行方正な優等生ではなく、詩人或は新聞記者としても、端正謹直な紳士で無かつたことは事実である」と語っている。しかし、胡堂は啄木の才能を認め、啄木の死後は著作を収集し、また自身の随筆にもさまざまなエピソードを書き残している。学生時代から胡堂は啄木と手紙を交しており、生涯大切にしていた。

胡堂は、手元に残していた啄木からの手紙11通を、自身の意志で日本近代文学館（東京都）へ寄託した。そのほか、石川啄木記念館（現在～2024年12月まで休館予定）には2通が収蔵されている。胡堂にとって啄木は、青春の象徴のような存在だったのかもしれない。

石川啄木書簡 野村胡堂宛
(明治34年12月31日付)

明治35（1902）年の年賀状 【石川啄木記念館画像提供】



いしかわ たくぼく
石川 啄木

明治19（1886）年－明治45（1912）年

詩人、歌人。岩手県盛岡市出身。盛岡中学の後輩。盛岡中学を中退し、上京。故郷で代用教員、北海道で新聞記者を勤め、再び上京する。東京朝日新聞社に入社。著作に『あこがれ』『一握の砂』など。

はらはむは惜しと
微笑む人もありや
み袖の今日の
淡雪小雪。
新春の初に。
争はむ人も
あらずよ
新春の春の
うたげの
かるたの小鷹。

恩師からの手紙 — 日本一の謝恩会 —

「よく叱る師ありき 髯の似たるより山羊と名付けて 口真似もしき」と石川啄木が詠んだモデルの人物が、盛岡中学の数学教師富田小一郎である。

昭和14（1939）年6月3日、東京赤坂の料亭幸楽で、啄木の同級生たちが中心となり、恩師富田小一郎を囲む会が盛大に催された。

胡堂はもちろんのこと、米内光政（海軍大臣・のち内閣総理大臣）、板垣征四郎（陸軍大臣）、鹿島精一（鹿島組社長）、田子一民（衆議院議員）、金田一京助（言語学者）、郷古潔（三菱重工業社長）など錚々たる面々が参加したこの謝恩会を、新聞各社は「日本一の謝恩会」「日本一幸福な先生」と報道した。

謝恩会后、胡堂は勤めていた報知新聞が撮影した謝恩会の写真を富田へ送ったようである。富田からの返事には、数日前にすでに送られていた『銭形平次』の新著のお礼とともに、胡堂の気遣いに対する感謝の気持ちが綴られている。



写真「富田小一郎謝恩会」 昭和14（1939）年6月3日撮影
【盛岡てがみ館蔵】



第一流の「読者作家」としてのご活躍を嬉しく思います。

報知新聞が撮影した写真と『銭形平次』の新刊をありがとうございます。

この度は、私のために歓迎会を開催してくださり、ありがとうございます。

とみた こいちろう
富田 小一郎

安政6（1859）年－昭和20（1945）年

教育者。盛岡市出身。東京帝国大学政治学科を卒業後、成立学舎教授を経て、盛岡中学の数学教師となる。岩手育英会の創設者。私立盛岡商業学校（現盛岡商業高等学校）や私立盛岡実践女学校（現盛岡市立高等学校）の創設にも尽力。数々の人材を育て上げる。

富田小一郎書簡 野村胡堂宛
昭和14（1939）年6月13日付

拝啓今回は老生之為め歓迎会を御催し被下候御芳志実に感謝に堪へさると共に久々に面各位に御目に懸りし愉快は何とも言ひかたがりし、昨日報知新聞の撮影せる貴重な写真御贈被下文数日前には銭形捕物白話第七号御贈被下御好情詢に難有厚く御礼申上候只遺憾なりしは御多数御会合被下候為め緩々御物語の出来さる一事なりしも貴下御錦地第一流の民衆作家として御名声赫々たりと承り真に嬉しく御悦申上居候

昭和十四年六月十三日
小一郎 敬具

野村様
侍史

生涯続いた交友

明治45（1912）年に報知新聞へ入社した胡堂は、記者として勤めながら、小説家・音楽評論家として活躍していく。残っている手紙の内容から、その間も学友たちとの交流が続いていることをうかがい知ることができる。

友人たちは、代表作『銭形平次捕物控』をはじめとした胡堂の作品を楽しみ、また、友人たちも自身の著作などを胡堂へ贈り、互いに感想を送り合った。

胡堂は定期的に親しい友人たちと集まっており、盛岡中学時代の恩師富田小一郎を囲む謝恩会など、楽しい再会の様子は、残っている写真から伝わってくる。

友人たちとは、子供たちの結婚式の媒酌人を依頼されるなど、親しい間柄だった。

盛岡中学の級友金田一京助や弓館小鰐、一高の学友辰野隆などとは新聞や雑誌の企画で対談・座談会を行っている。対談では必ず青春期の楽しく懐かしい思い出話で盛り上がった。

昭和29（1954）、30（1955）年に胡堂が白内障のため両目を手術した際には、体調を心配した友人たちから、回復祈願の寄せ書きが送られている。

胡堂と学友たちの友情は生涯変わることなく続き、胡堂の人生を支え続けたのである。



盛岡中学時代の親しい友人たちと
（左から6人目、和装が胡堂）

胡堂へ宛てた友人・塚本虎二の手紙



塚本虎二書簡 野村胡堂宛

昭和29（1954）年4月23日付

一高・東大法学部で胡堂と同期だった塚本虎二が、昭和29年に、白内障の手術を受けた胡堂を見舞う内容。

左目の手術の経過は順調とのこと。右目の十分の視力回復を祈ります。

御病床の中、拙著を読んできたり、手紙を書いてくださったり、ありがとうございます。

御平安を祝します。御申訳省略、まことに恐縮、感謝の至りであります。御病床にて拙著をお読み下さったり。御不自由な目で長い長い御手紙をお書きになった上、思ひもかけぬ愛の御贈物まで頂き、続けざまの愛のつづてに、全く以てのび、しまひました。すべて有りがたく、主にありて頂戴、天国まで拝借致します。御手術の経過御順調の由、お喜び申上ります。右のお眼の方も御手術の上、十分の視力御回復を祈ります。今からこゝで愈々視力を必要とされる事で御座います。折角お自重下

つかもと トラジ
塚本 虎二

明治18（1885）年－昭和48（1973）年

無教会主義キリスト教伝道者。一高、東大法学部で胡堂と同期。一高時代から内村鑑三に師事。一旦、農商務省に入るが、聖書研究のため辞任。『イエス伝研究』や新約聖書改訳に尽力する。

胡堂へ宛てた友人・小野寺直助の手紙



小野寺直助書簡 野村胡堂宛

昭和33（1958）年4月23日

友人の小野寺直助は胡堂の晩年の主治医であった。学士院定例会議に出席するため、直助は毎月九州から上京し、そのたびに胡堂を訪ね診察した。昭和38年4月、胡堂が亡くなる直前にも診察し、その容体を金田一京助に伝えている。

お互いに食べ過ぎない事が大事です。少し位の酒は良薬で、命を縮めるものではないと思います。

我々の年齢になると、健康面で何となく不安が感じられます。

毎月十二日上京するので、これからはお訪ねする機会が多くなると思います。

僕の同級生に野村胡堂がいると言うと、びっくりして僕を見直してくれました。

あなたが大衆を相手にしなければ、有言実行されていたことに、私はいつも感服していました。

今しばらく辛抱して手術を受ければ老眼鏡でまた見えるようになると思います。

謹啓 久しくお目にかかりませんが、お体の方は御元氣との御手紙にて嬉しく存じます。眼の方は白内障あれば熟するまでは手をつけないのが医者の常識ですから、今暫時御辛抱になってから手術をうけられると老眼鏡でまた見える様になられる事と存じます。銭形平次の新作が出るのが寂しいのは私一人の事でなく残念な事ですが、兄の桐眼で大衆を相手にしなければ、不可なりと言われて実行されたのにも感服して居りました。僕を同級生に、野村胡堂君ありといふとビックリして僕を見直してくれました。豪いナアと敬服して居りました。五月上京して若干暇があり、毎月十一日に学士院の定例会議があり、それからからは必ず、お訪ねする機会が多いと存じます。

郷古君も少々弱いところを生まれましたので、今迄の様な活動はさせぬがよいと思います。先日上京の時、及川君に電話したら矢張り肺炎の後に、肺に少し結核性の疾患あるらしく、見舞に行こうと言った途、中道路が修理中で自動車を通らないから来てくれるなといふ事でやめました。

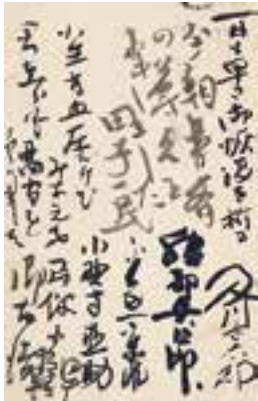
佐々木次郎からの通信で、かねてフラフラして居られた松本幸蔵君が遂に逝されました由、吾々の年齢になると何となく不安が感じられます。お互にたべすぎぬ事が肝要、少し位の酒は良薬とは決して命を縮めるもので無いと思います。

おの 直助
小野寺 直助

明治16（1883）年－昭和43（1968）年

医師。岩手県奥州市出身。盛岡中学で胡堂と同級。京都帝国大学福岡医学大学（現九州大学医学部）卒業後、九州帝国大学教授、久留米医科大学学長を歴任。胡堂の晩年、主治医として最期を看取る。

胡堂に宛てた友人達の寄せ書き



及川古志郎ほか友人一同書簡 野村胡堂宛
昭和29（1954）年10月26日付

写真「金田一京助文化勲章受章同級生祝賀会」
昭和29（1954）年10月25日撮影
前列右から小野寺直助、田子一民、金田一京助、郷古潔、服部兵次郎。
後列右から弓館小鰐、及川古志郎。
【盛岡市先人記念館蔵】

白内障の手術のため入院していた胡堂の体調を見舞う友人たちからの寄せ書き。消印が昭和29年10月26日の午前中に捺されていること、友人たちの名前から、その前日に開催された金田一京助の文化勲章受賞を祝う同級会で書かれた可能性が高い。

関連イベント

講演会

「学友からの手紙 ～胡堂と学友たちとの絆をたどる～」



日 時 令和6年3月16日（土） 午後1時30分～3時
講 師 八重嶋 勲さん
（『学友からの手紙 野村胡堂の青春を育んだ書簡群』著者）

『学友からの手紙 野村胡堂の青春を育んだ書簡群』を執筆された八重嶋勲さんをお招きし、講演会を開催しました。

胡堂と学友たちの愉快的な学生時代の思い出やエピソードが書かれている書簡を元に、当時の時代背景や交友関係など、詳しく解説していただきました。また、新著執筆の裏話として、書簡整理作業に至った経緯や苦労話なども伺いました。

講演会後には、企画展担当学芸員による展示解説があり、多くの方々が参加してくださいました。



講師の八重嶋勲さん

令和5年度 第2回企画展 「拝啓 野村君 ～学友からの手紙～」 展示目録

No.	資 料 名	年 代	備 考
1	野村胡堂宛岩動露子書簡	明治32(1899)年4月11日付	
2	野村胡堂宛原抱琴書簡	明治32(1899)年9月4日付	
3	野村胡堂宛岩動炎天書簡	明治36(1903)年12月20日付	
4	野村胡堂宛柴浅茅書簡	明治38(1905)年8月22日付	
5	野村胡堂宛野村長四郎書簡	明治38(1905)年12月28日付	
6	野村胡堂宛上野孝男書簡	明治40(1907)年1月14日付	
7	写真「富田小一郎謝恩会」	昭和14(1939)年6月3日撮影	盛岡てがみ館所蔵 パネル展示
8	野村胡堂宛富田小一郎書簡	昭和14(1939)年6月13日付	
9	岩動炎天 句集『片雲』	昭和37(1962)年10月31日発行	岩動道行編集、発行 茗溪堂
10	辰野隆『忘れ得ぬことども 辰野隆対談集』	昭和27(1952)年3月30日発行	三笠書房
11	野村胡堂・辰野隆対談記事 「辰野隆・連載対談 忘れ得ぬことども 第一回野村胡堂」	『週刊朝日』 昭和22(1947)年10月	パネル展示
12	野村胡堂・辰野隆対談記事「人生の妙味を語る」	『キング』 昭和24(1949)年5月	パネル展示
13	塚本虎二『私の無教会主義』	昭和37(1962)年12月23日発行	伊藤節書房
14	野村胡堂宛塚本虎二書簡	昭和29(1954)年4月23日付	
15	写真「金田一京助文化勲章受章同級生祝賀会」	昭和29(1954)年10月25日撮影	先人記念館所蔵 パネル展示
16	野村胡堂宛及川古志郎ほか友人一同書簡	昭和29(1954)年10月26日付	及川古志郎、服部兵次郎、金田一京助、小野寺直助、田子一民、弓館小鰐、郷古潔連名。
17	野村胡堂・金田一京助・弓館小鰐座談会記事 「初春放談 岩手をしのぶ」(上)	『毎日新聞岩手版』 昭和31(1956)年1月1日掲載	パネル展示
18	野村胡堂・金田一京助・弓館小鰐座談会記事 「初春放談 岩手をしのぶ」(下)	『毎日新聞岩手版』 昭和31(1956)年1月5日掲載	パネル展示
19	野村胡堂宛小野寺直助書簡	昭和33(1958)年4月23日付	

※旧字体は、適宜新字体に直しました。

※所蔵者名の無記載資料は、野村胡堂・あらえびす記念館の所蔵資料です。

【参考文献】 ※展示している引用文の多くは、こちらの参考文献から引用しました。

■野村胡堂著『中央公論文庫 胡堂百話』(中央公論社、昭和56年初版発行)

■野村胡堂著『旺文社文庫 随筆銭形平次』(旺文社、昭和54年初版発行)

■『私の履歴書 文化人1』野村胡堂(日本経済新聞社、昭和58年初版発行)

企画展（特別展）

胡堂と関東大震災 ～関東大震災から100年 あの日、胡堂が見た東京～

大正12（1923）年9月1日午前11時58分44秒。東京、神奈川を中心とした南関東一帯で、神奈川県西部の海底深さ23kmを震源とするマグニチュード7.9の大地震が発生した。

令和5（2023）年は、関東大震災の発生から100年である。100年前、野村胡堂は東京に居住しており、地震発生時は報知新聞への出勤途中だった。

当館には、震災から数日後に故郷の親類に宛てた、胡堂とハナの書簡が残されている。胡堂一家の安否のみならず、東京を中心とした被害状況、混乱する人々や物資の窮乏など、被災の様子が克明に記されており、単に家族の無事を知らせるだけでなく、新聞記者野村胡堂による被災地からのルポルタージュとなっている。

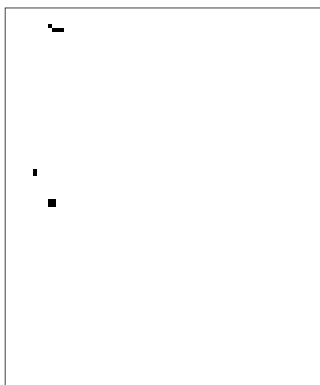
今回は、この書簡を全文（便箋20枚）、読み下し文と並べて展示した。よりわかりやすく、興味を引く工夫として、記述内容の要点を記した見出しを作成し、配置した。震災の翌年、震災から東京が復興する様子を記録した「生れ代つた東京 復興途上の姿を見るの記」と題した胡堂の連載記事パネルもあわせて展示した。

開催期間 7月23日（日）～令和6年3月31日（日）

入場者数 796人



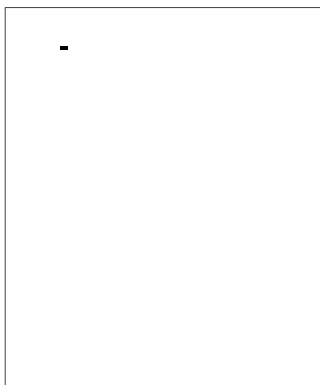
展示の様子



野村胡堂・はな書簡 故郷の親類宛

大正12（1923）年9月7日付

便箋20枚にわたり、関東大震災当時の東京の様子を伝える書簡。親類と思われる橋本恒太郎やヒノヤタクシーの創業者大野宗三が登場する。



連携する団体との交流

- ・町内小中学校（小学校4校／349人、中学校3校／426人）
- ・盛岡地区人物記念館（3回／21人）
- ・岩手県博物館等連絡協議会（1回／47人）

寄付者ご芳名

【寄付者ご芳名】（寄贈年月日順）

ご寄付いただきました方々に心より御礼申し上げます。

（令和5年4月1日～令和6年3月31日）

青木博幸様（書籍 / 東京都）、平谷美樹様（著書 / 金ヶ崎町）、小澤博幸様（レコード / 盛岡市）、
八重嶋勲様（著書 / 紫波町）

入館者・運営費・レファレンス及び収蔵資料利用

(1) 入館者・あらえびすホール貸館状況

年 度	有料入館者数（人）			無料入館者数 （人）	入館者総数 （人）	ホール貸館 （件）
	一 般	子 ど も	団体一般			
令和4年度	1,688	57	188	6,084	8,017	71
令和5年度	979	19	219	6,773	7,990	64

(2) 運営費（千円）

年 度	運営事業費	施設管理費	合 計
令和4年度	14,942	19,384	34,326
令和5年度	14,788	24,460	39,248

(3) レファレンス対応件数 11 件

(4) 収蔵資料利用許可件数 8 件（20点）

特定非営利活動法人 野村胡堂・あらえびす記念館協力会

野村胡堂・あらえびす記念館協力会は、平成22年4月に特定非営利活動法人としての認証を受け、平成28年4月から野村胡堂・あらえびす記念館の指定管理者に選定され、記念館の事業運営及び施設管理を行っています。胡堂を顕彰する活動を通して「胡堂・あらえびす」の功績を広く地域に知らしめるとともに、文化振興の拠点としての機能を維持し、自主事業を通じて広い年代の方々に芸術・文化に触れる機会を提供しています。

令和5年度主な自主事業実績

項 目 名	主 な 内 容	開 催 月 日	参加者人数
コンサート	読売新聞共催あらえびすレコードコンサート	R5. 10. 1	59 人
	芹田碧ヴァイオリンコンサート	R5. 11. 23	73 人
	不来方高校音楽部クリスマスコンサート	R5. 12. 23	95 人
イベント	バスツアー（会員限定） 三陸鉄道「震災学習列車」、東日本大震災津波伝承館等	R5. 6. 26	35 人
	夏休み映画上映会	R5. 7. 27 ～ 30	89 人
	ふしぎな世界 科学	R5. 7. 29	48 人
	キッズフェスティバル（共催：河東令和会）	R5. 9. 9	699 人
	冬休み映画上映会	R6. 1. 5 ～ 8	34 人

施設の利用案内

1 開館時間

午前9時～午後4時30分
ただし、入館は午後4時まで

2 休館日

毎週月曜日（祝日の場合その翌日）
年末年始（12月28日～1月4日）

3 入館料

個人入館料：一般 /310円 小・中・高生 /150円
団体入館料：一般 /260円 小・中・高生 /100円
※団体入館料は20人以上

5 各種申請手続き及び様式

■あらえびすホール申請手続き

野村胡堂・あらえびす記念館条例第7条(入館等)に基づき、占有的に使用又は利用する場合は、使用許可申請書（別紙様式1）を記念館に提出すること。

様式 1

野村胡堂・あらえびす記念館使用許可申請書

特定非営利活動法人 野村胡堂・あらえびす記念館協働会
理事長 野村 晴 一 様

申請者 住所又は所在地
氏名又は名称
使用責任者(団体の場合)
連絡先

野村胡堂・あらえびす記念館を使用したいので、野村胡堂・あらえびす記念館条例第7条第1項の規定により、次のとおり申請します。

使用の目的	
使用する施設名	☐ ホール ☐ 読書室 ☐ 図書室 ☐ ギャラリー ☐ 展示室 ☐ その他 ()
使用の日時	年 月 日 () 時 分から 時 分まで
使用する設備等	☐ 冷暖房 ☐ 音響機器 ☐ ピアノ ☐ スクリーン ☐ プロジェクター ☐ その他 ()
入場料の有無	有 (その額 円) 無
備 考	

※記念館処理欄

許可の区分	許可 不可 (理由:)
有効年月日 受取番号	年 月 日 第 号
使用料	免除 総額 円 内訳: 使用料 円、設備使用料 円、電気又は冷暖房料 円

決 算 長 事務局長 受 付

..... (受 付 印)

備考 用紙の大きさ 日本工業規格 A 4

4 あらえびすホール

■概要

収容 最大120席（イスは可動式）187平方メートル
設備 ピアノ1台、可動式ステージ、スポットライト、
大型スクリーン、プロジェクター使用可能
利用時間 9：00～17：00
（事情によっては21：00まで利用可：要相談）

■使用料（1時間毎）

区分	入場料		無料		有料	
内訳	申請者住所又は職場		紫波町内	町外	紫波町内	町外
	普通使用料		280円	840円	420円	980円
	設備使用料		523円	523円	523円	523円
	特別使用料	冷房料	320円	320円	320円	320円
		暖房料	292円	292円	292円	292円
冷暖房無しの場合			800円	1,360円	1,240円	1,500円
夏期：冷房使用の場合			1,120円	1,680円	1,260円	1,820円
冬期：暖房使用の場合			1,090円	1,650円	1,230円	1,790円

※合計使用料額は10円未満切捨て

■入館料等の減免及びその手続き

野村胡堂・あらえびす記念館条例第12条(入館料等の減免)に基づき入館料等の減免等を申請する場合は、入館料減免申請書（別紙様式2）を記念館に提出すること。

様式 2

野村胡堂・あらえびす記念館入館料等減免申請書

申請者 住所又は所在地
氏名又は名称
使用責任者(団体の場合)
連絡先

野村胡堂・あらえびす記念館入館料等の減免を申請したいので、野村胡堂・あらえびす記念館条例第12条の規定により、次のとおり申請します。

申請年度の区分	1 入館料	2 設備料
申請年度の開始		
入館料減免の申請	年 月 日 () 時 分から 時 分まで	
入館料減免の申請	円	
備 考		

※記念館処理欄

許可の区分	許可 不可 (理由:)
有効年月日 受取番号	年 月 日 第 号
使用料	免除 総額 円 内訳: 使用料 円、設備使用料 円、電気又は冷暖房料 円

決 算 長 事務局長 受 付

..... (受 付 印)

備考 用紙の大きさ 日本工業規格 A 4

6 交通の御案内

JR東北本線日詰駅から車で約6分
JR東北本線紫波中央駅から車で約10分
JR東北新幹線盛岡駅から車で約40分
JR東北新幹線新花巻駅から車で約25分
東北自動車道紫波I.Cから車で約15分

7 案内図



令和5年度 野村胡堂・あらえびす記念館 館報

発行日 令和6年7月31日
編集・発行 特定非営利活動法人 野村胡堂・あらえびす記念館協力会
(野村胡堂・あらえびす記念館指定管理者)
〒028-3315
岩手県紫波郡紫波町彦部字暮坪193-1
TEL 019-676-6896・FAX 019-676-6897
印刷 有限会社 紫波印刷